

2022年 ASK?映像祭は今年の応募数は37作品、そのうち入賞入選が21作品となった。全体的にクオリティが高かったので、入選数も多い結果となった。

応募作品の内、実写が10作品あったが、入選に残ったのは2作品であった。

アニメーション CG 作品が27作品であった。アニメーション作品はテイスト、テーマ等多岐にわたっていたが、コロナ禍か、戦争等の時代背景の影響か、カタストロフをイメージするもの、内面に向かうものなどが目立った。

大賞は川畑那奈の「WEATHER MAP」である。

川畑は、2020年にも「ONEWORLD」でASK?賞を受賞している。人間が世界の部品の様に翻弄され、消費されている姿が描かれていた。今回の作品では夕焼けが赤いと雨が降るという不吉なイメージが、現在のわれわれのあり方と重なる。

ASK?賞を受賞した金子勲矩の「Magnified City」も舞台は廃墟である。廃墟にプロジェクター人間、レンズ人間などが虚構の美しい街並みを映写することで、一瞬幻の街並みが出現するがすぐに燃え尽きてしまう。日々の繁栄のはかなさを感じる秀作であった。

西村智弘賞、酒井日花の「瘡 empathy」は、胸にできた瘡との関係を描いた作品である。自分を脅かす瘡の存在をクールに描いている。不安と共存するイメージは、われわれも共有することが出来る。

久里洋二賞、多田あかりの「#」は、孤独を癒す主人公に共感する人が多いのではないだろうか。

新海大吾の「しとしと」、倉沢紘己「intercom」、黒澤幸代の「庭の詩学」、菊谷達史「うつくしき動物たち」等、内的感覚を元に綴った秀逸な作品であった。

しょーたは2018年「がんばれ！よんぺーくん」で大賞を受賞している。今回の「GOLD TIGER」もテンションの高いユニークなテイストを引き継いでいる。ミュージックビデオであるが音楽と対等な存在感であった。

橋本誠史の「はしもとロボットアニメ」も昨年が続いての参加である。強力なパワー感は変わらない。

村田茜「口をひらく」、まちだりな「蟻たちの搭」、倉沢紘己「プリンがつぶれるまで」、片山風香「よもやま短編集」はアニメーションならではの表現の可能性を感じる作品であった。

Kino MANUAL「Zen for TV」は枯山水の石庭とノイズをうまくコラボさせた作品であった。JIANG YIFAN 「まいど！」は懐かしの昭和のイメージを想起させる。

ケドモン「マンガガールズ」は、漫画のコマとセリフ、実写をうまく使った作品であった。

山森正志「世界で一番すばらしい俺」、志波景介「これからもきつと言えない」は、実写を使いクオリティの高い詩的な世界を描くことに成功している。

相内啓司「REM れむ - The waves of endless dreams」はまさに現代の黙示録的世界観を描いている。

佐藤瞭太郎「All Night」は、フリーの3Dモデルを用いた実験的要素が強い作品である。素材の使い方に違和感がある作品であるが、CGのさらなる可能性を感じさせる意欲的な作品であった。